

# 和倉温泉復興計画

23班

## 要旨

和倉温泉は令和6年能登半島地震の影響で大幅に観光客数が減少し、いくつかの旅館は営業を再開したものの、観光客数は戻っていない。その原因として、能登の復興状況が認知されておらず、能登への旅行自体が減っていることが考えられる。そのため、私たちの班では「旅して応援、能登」という能登地域の旅行を対象とした団体旅行応援キャンペーンを利用した旅行プラン案を2つ作成した。これから更にプランを固め、旅行会社とも協力して、調査の結果特に観光客数が減少していることが明らかになった首都圏をターゲットに、プランを広告していこうと考えている。

## 1.研究背景と目的

令和6年能登半島地震の影響により能登全体で甚大な被害を受け、能登に来る観光客数が減少したという記事を見た。能登のシンボルである和倉温泉でも地震の影響で現在も20軒中11軒が休業している。9軒が仮営業として営業再開したところや世界的建築家の設計による新たな旅館を開業するところもある。万全な再開までには、まだ時間がかかるが、着実に復興に近づいてきている。しかし、営業再開した旅館があることや復興が進んでいることが世間に浸透しておらず、能登に行くことは復興の妨げになると考えられている人も多い。

どうしたら能登に足を運び和倉温泉に泊まってもらえるのか考えた所、石川県が主体で行っている「旅して応援、能登」という団体旅行応援キャンペーンがあることを知り、これを利用したお得なツアープランを作成し、和倉温泉の宿泊を組み込むことで、和倉温泉の観光客数を増やそうと考えた。

## 2.調査・分析

### 〈和倉温泉への観光客数の分析〉

和倉温泉の観光客数の分析を行うにあたって、和倉温泉旅館協同組合からデータを頂いた。コロナ禍直前の2019年度・コロナ禍後で能登半島地震直前の2023年度・能登半島地震後の2025年度の地域別観光客数の動向について分析を行った。

結果は図1のようになった

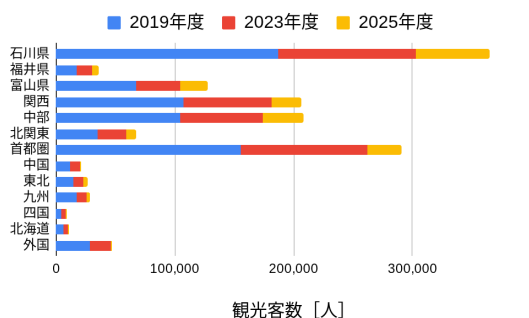


図1 各年度における地域別の和倉温泉への観光客数  
どの地域客数いても和倉温泉への観光客数は減少しており、特に震災前後の2023年度から

2025年度に大幅に減少していることがわかった。それぞれの地域の2023年度と2025年度の減少割合を計算すると図2のようになった。

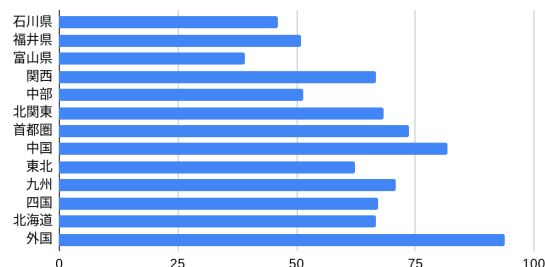


図2 地域別の2023年度から2025年度の減少割合

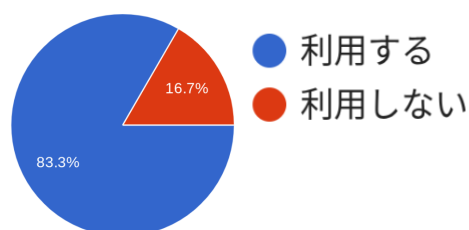
石川県から離れた地域ほど減少割合が大きく、石川、福井、富山以外の地域では減少割合が60%を超え、北陸3県でも40%を超えた。

2023年から2025年にかけての減少割合が全体的に高いことから、やはり震災は和倉温泉の観光に大きなダメージを与えたと考えられる。特に、観光客数も減少割合も多い首都圏からの観光客数減少は大きな課題であると言える。

### 〈「旅して応援、能登」に関する調査〉

「旅して応援、能登」(調査実施時では「今行けるの」という名称)は石川県が行っている能登12市町を周遊する8名以上の団体旅行にバス貸し切り補助、宿泊補助、対象店舗で使えるクーポンの配布などさまざまな補助を受けることができる団体旅行応援キャンペーンである。その知名度とよりよい利用方法を探るために、七尾高校の生徒とその保護者計36人を対象にアンケート調査を実施した。

「8名以上の団体旅行で自家用車以外での移動代、宿泊費の補助や一日あたり一人4000円の特定のお店で利用できるクーポンが付いてくるプランがあったら利用しますか。」という質問に対する結果は図3のようになった。



### 図3 アンケートの結果(回答者36人)

続いて利用すると答えた理由と利用しないと答えた理由を聞いた(複数回答可)。

利用すると答えた30人のうち、「旅行代が安くなるから」と答えた人は22人、「プランが組まれているから」と答えた人は9人、「復興支援に携わりたいから」と答えた人は15人だった。

利用しないと答えた6人のうち、「人数制限があるから」と答えた人は4人、「アクセスが悪いから」と答えた人は2人、「特定のお店だけなのが不便だから」と答えた人は1人、「旅行自体しないから」と答えた人は1人だった。

これらの結果から、多くの人が割引のきく旅行への興味と震災復興への協力をしたいという気持ちを持っていることがわかった。また、8人以上という人数制限は一家族では満たしづらく、プランを提案する対象は人数が集めやすい必要があると考えた。

また、「旅して応援、能登」の補助条件の一つである「8人以上の旅行」を満たす具体的な利用団体をはじめ、「旅して応援、能登」の現在の利用状況について更に把握するために、「旅して応援、能登」を利用したツアーを開催していた株式会社丸一観光、株式会社東武トップツアーズ、株式会社ビーウェーブに電話し、お話を伺った。

その結果、これまでに「旅して応援、能登」を利用したツアーはいくつか行われていて、病院の障がい者の方たちの日帰り旅行や、東京の会社の社員旅行、町内会の日帰り旅行など、まとまった人数がいる団体が利用しているということがわかった。

### 3.解決に向けた提案と実践

調査で明らかになったことをもとに、私たちは2通りのツアープランを作成した。

#### ①能登ポケモンツアー

石川県と一般財団法人ポケモン・ウィズ・ユー財団は令和6年能登半島地震で被災した人々に笑顔を届けることを目的とした活動へ取り組むための連携協定に基づき、ポケモンを活かした観光支援に取り組んでいる。例えば、ポケモ

ンのイラストが描かれたマンホール「ポケふた」の能登6市町への設置や、わくらポケモン足湯の開業がすでに行われた。さらに、2026年7月7日に、のと里山空港がのと里山ポケモン・ウィズ・ユー空港としてポケモンにあふれる空間になってリニューアルオープンした。この流れを活用し、ポケモンが好きな子どもとその家族をターゲットに、観光客減少が課題となる首都圏から飛行機を利用して能登を観光してもらい、和倉温泉に宿泊してもらうことを目的としたツアープランを作成した。プランの作成後、株式会社ビーウェーブの廣田様にご助言をいただき、修正、改良を行った。

#### ②被災地の現状を知るツアー

能登半島地震による被災前と被災後でどれほど和倉温泉が変わってしまったのかを、観光客やさまざまな企業に知ってもらうために、和倉温泉街で被災前後を写真などを用いて、現在の復興状況と比較しながら回ることを考えた。また、震災当時の状況や、和倉温泉だけでなく能登の甚大な被害をより多くの人に知ってもらい、後世に伝えていくためにも、のと鉄道で行われている震災語り部列車をツアープランに取り入れた。実際に被災した方々からお話を聞きながら、鉄道から能登ののどかな風景も楽しむことができ、観光客にも復興の歩みを知りたい企業の方々にも満足のいくものとなっている。また、能登ワインで行われているいしかわ震災プログラムを取り入れ、震災をどう活かしてきたかや、企業の復興の歩みについて学べるようツアープランを考えた。ただ、石川全体の魅力にも触れてもらうため、兼六園観光をプランに入れ、石川の自然の豊かさをより知ってもらい、能登も含めまた石川に来たいと思わせるようなツアープランにした。

### 4.考察

能登にあるポケモンを利用したツアーではポケモンは子供だけではなく大人にも人気があり多くの観光客が訪れると思われる。実際、令和8

年7月7日に開業した能登里山ポケモンウイズ・ユー空港では初日にたくさんの人が訪れていて人気の高さが伺える。また、被災地の現状を知ってもらうツアーは能登半島地震での現状をしってもらい、後世に伝えることができる。ポケモンや現状を知るツアーを通してたくさんの観光客が訪れると考えられ、能登半島地震の出来事を風化させない効果もあると考えられる。

## 5.今後の課題と展望

現状、旅行プランは作成できたが、実際にそのプラン通りの旅行が実行できるかの確認ができていない。また、「旅して応援、能登」の補助を受けるためには旅行会社が行うツアーであることが条件なので、プランを旅行会社に提案する必要がある。そこで私たちは株式会社ビーウェーブがおこなっている「オーダーメイド・グループツアー」に着目し、そのモデルツアープランとして旅行プランを提案することを考えている。

プランが固まり、実際に使えるようになった後は、各プランのターゲットにプランを宣伝し、実際に能登を旅行し、和倉温泉に宿泊していただくよう計画している。

しかし、私達の世代の探究活動は終わりを迎えてつつある。そのため、この探究活動は1つ下の世代に引き継ぐことができるため引き継いで完成させてほしい。

## 6.結論

令和6年能登半島地震によって和倉温泉への観光客数が大幅に減少しており、特に首都圏などの遠方からの観光客の減少が大きな原因であることがわかった。そこで「旅して応援、能登」を活用したポケモンツアーと被災地の現状を知るツアーを計画した。これらのツアーは和倉温泉への宿泊を組み込むことで観光客の増加だけでなく、能登の復興状況や被災地の現状を知ってもらう機会にもなると考えられる。

以上のことから、和倉温泉の復興には、営業再開を積極的に発信するとともに、補助制度を利用した魅力的な旅行プランを旅行会社と連携して実現することが重要だと考える。また、復興支援は一時的ではなく、継続して能登に観光客が訪れるような仕組み作りが必要である。

## 7.参考文献

<https://imaikeru-noto.pref.ishikawa.jp/>

<https://www.wakura.or.jp/>

## 8.協力団体

株式会社ビーウェーブ 廣田恵一氏  
和倉温泉旅館協同組合  
株式会社丸一観光  
株式会社東武トップツアーズ

# 書き方見本

# 融合プロジェクトにおける 論文作成の意義と方法

0 班

濱岡駿一 高嶋侑馬

## 要旨

要旨とは、論文全体の概要を200～350字程度で簡潔にまとめたものであり、研究の背景や目的、内容、成果・結論を示す部分である。本論文は、融合プロジェクトにおける探究論文の作成方法を示す執筆例である。論文作成を通して、論理的思考力、客観的に活動を振り返る力、他者へ分かりやすく伝える文章力を育成することを目的としている。各章では、論文構成に沿った記述例とともに、執筆時のポイントや留意点を示し、探究活動を論理的にまとめる方法を解説する。なお、本論文は執筆例として各章の説明や書き方を示すことを目的としているため、章ごとの内容は必ずしも一つの研究として連続した構成にはなっていないことに留意してほしい。

## 1. 背景と目的

研究背景と目的では、「なぜこのテーマに取り組もうと考えたのか」「どのような課題があるのか」「その課題に対して何を明らかにしたいのか、またはどのような解決を目指すのか」を記述する。興味を持った理由だけでなく、文献や統計資料、アンケートなどの客観的な情報を踏まえ、研究する必要性を示すことが重要である。

本論文では、融合プロジェクトにおける探究論文の作成方法を題材とした。探究活動では、調査や実践だけでなく、その過程を論理的に整理し、第三者へ分かりやすく伝えることが求められる。しかし、論文作成に慣れていない生徒にとっては、「何を書けばよいのか」「どのような順序でまとめればよいのか」が課題となることが少なくない。

そこで、本論文では融合プロジェクトの論文構成に沿った執筆例を示し、各章で記述すべき内容や論理的な文章の組み立て方を具体的に示すことを目的とする。また、論文作成を通して、論理的思考力、客観的に活動を振り返る力、そして他者に分かりやすく伝える文章力の育成につながることを目指す。

## 2. 調査・分析

調査・分析では、「どのような方法で情報を収集したのか」「どのような結果が得られたのか」「その結果から何が分かったのか」を論理的に記述する。調査方法、調査結果、分析はそれぞれ役割が異なるため、区別して書くことが重要である。

まず、調査方法では、どのような資料を用いたのか、誰を対象に調査したのか、どのような方法で情報を収集したのかを具体

的に示す。文献調査、アンケート、インタビュー、現地調査、実験など、調査方法は様々であるが、その方法を選択した理由についても説明できると、より説得力のある論文となる。

次に、調査結果では、調査によって得られた事実のみを記述する。この段階では、自分たちの意見や考えは記述せず、客観的な情報を整理して示すことが重要である。また、図表を用いる場合は、「図1」「表1」のように番号とタイトルを付けるだけでなく、本文中で「図1より〇〇が分かる」「表1から△△という傾向が見られる」のように、図表から読み取れる内容を説明する必要がある。

最後に分析では、調査結果を基に「なぜそのような結果になったのか」「その結果からどのようなことが言えるのか」を検討する。ここでは、調査結果を根拠として論理的に説明することが求められる。「〇〇という結果であったため、△△であると考えられる」のように、事実を根拠として結論へつなげることが重要である。

探究活動では、「アンケートを実施した」「インタビューを行った」という活動自体を成果としてしまうことが少なくない。しかし、調査はあくまでも課題を明らかにするための手段であり、調査を行ったことが成果ではない。得られた結果を分析し、その後の提案や実践へどのようにつなげたのかを示すことが、この章で最も重要な点である。

本論文では、融合プロジェクトの目的や論文構成、探究活動に関する資料などを調査し、生徒が活動の過程を論理的に整理できる論文構成を検討した。その結果、「研究背景と目的」「調査・分析」「解決に向けた提案と実践」「考察」という一連の流れを明確に区別することで、活動内容を客観的かつ分かりやすくまとめられることが分かった。また、事実と意見を区別して記述することで、読み手にとって根拠が明確

な論文となり、自らの活動を客観的に振り返ることにもつながると考えられる。

### 3. 解決に向けた提案と実践

解決に向けた提案と実践では、調査・分析によって明らかになった課題を踏まえ、どのような解決策を考え、それをどのように実践したのかを記述する。本章では、単に思いついたアイデアを紹介するのではなく、調査結果を根拠として提案を導き出し、その提案を実際の行動へ結び付けることが重要である。

まず、提案では、調査・分析から明らかになった課題に対し、なぜその解決策を選択したのかを説明する。「〇〇という課題が明らかになったため、本班は△△を提案した」のように、課題と提案のつながりを明確に示すことで、論理的な文章となる。一方で、「〇〇があればよい」「〇〇を作りたい」といった願望だけでは提案とは言えず、その提案によってどのような課題の解決が期待できるのかまで説明する必要がある。

次に、実践では、提案した内容を実現するために行った具体的な活動を記述する。企業や行政への訪問・相談、イベントの開催、試作品の制作、アンケートの実施など、活動内容は様々であるが、「何を行ったか」だけで終わらせず、「その結果どのような反応や成果が得られたのか」「当初の計画と比べてどのような改善点が見つかったのか」まで記述することが重要である。実践が思うように進まなかった場合でも、その理由や改善点を整理することで、探究活動として大きな価値を持つ。

本論文では、「論文の書き方が分からない」という課題に対し、生徒が実際に参考のできる探究論文の執筆例を作成すること

を提案とした。その実践として、融合プロジェクトの論文構成に沿った見本論文を作成し、各章で記述すべき内容や論理的な文章の組み立て方、執筆時の注意点を具体例とともに示した。また、完成した論文を単なる見本ではなく教材として活用できるよう、各章で目的や留意点、探究活動において身に付けてほしい考え方を盛り込み、読みながら論文の書き方を学べる構成とした。

このように、調査・分析によって得られた課題を基に提案を行い、それを具体的な成果物や行動へ結び付けることで、探究活動は「調べて終わる活動」ではなく、「課題解決へ向けて行動する活動」となる。本章では、その過程を論理的に示すことが重要である。

### 4. 考察

考察では、調査・分析や実践を通して得られた結果を振り返り、「なぜそのような結果になったのか」「その活動から何が分かったのか」を論理的に記述する。調査結果を繰り返してまとめることや、活動の感想を書くことは考察ではない。得られた結果を根拠として、その意味や価値を考え、自分たちの活動を客観的に評価することが重要である。

考察では、「〇〇という結果が得られたため、△△であると考えられる」「当初は□□を想定していたが、実践を通して◇◇という新たな課題が明らかになった」のように、結果と考えを結び付けながら記述すると論理的な文章となる。また、期待どおりの成果が得られなかった場合でも、その原因や改善点を整理することで、探究活動としての価値は十分にある。失敗や課題も重要な成果の一つである。

本論文では、探究論文の執筆例を作成することにより、論文の構成や各章で記述すべき内容を具体的に示すことができた。また、論文の書き方だけではなく、各章の目的や注意点、論理的な文章構成についても盛り込むことで、完成例と解説を兼ね備えた教材として活用できる構成となったと考える。

一方で、本論文は論文作成の見本として作成したものであるため、一つの探究テーマを深く追究した研究論文とは性質が異なる。そのため、章ごとの説明を優先した結果、研究内容の一貫性や章間の連続性は一般的な論文と比べて弱くなっている。しかし、これは探究論文の書き方を学ぶという目的を達成するための構成であり、本論文の役割を踏まえれば適切であると考えられる。

探究活動は、正解を導き出すことだけを目的とするものではない。根拠を基に考え、自らの活動を客観的に振り返り、その成果や課題を他者へ分かりやすく伝えることに大きな意義がある。考察は、その一連の思考を整理し、今後の探究や学びへとつなげるための重要な過程である。

## 5. 今後の課題と展望

今後の課題と展望では、本研究や探究活動を通して明らかになった課題や限界を整理するとともに、今後どのような取組や発展が考えられるかを記述する。本章は、活動の反省を書く部分ではなく、「今回の活動を踏まえ、次に何を行うべきか」を論理的に示すことが目的である。

探究活動では、限られた時間や環境の中で活動を行うため、すべての課題を解決することは難しい。そのため、「十分な調査ができなかった」「対象者を広げて調査する必要がある」「提案を継続的に実践・検証する必要がある」など、本活動で明らか

になった課題を整理することが重要である。また、その課題に対し、「今後どのような方法で改善できるか」「さらにどのような活動へ発展させられるか」まで述べることで、探究活動の発展性を示すことができる。

本論文では、探究論文の執筆例として各章の構成や書き方、論理的な文章の組み立て方を示した。しかし、生徒一人一人の探究テーマや活動内容は異なるため、本論文だけですべての書き方を示すことはできない。今後は、実際の生徒の論文を参考事例として蓄積したり、分野ごとの執筆例を追加したりすることで、より多様な探究活動に対応した教材へ発展させることが期待される。

また、本論文は論文作成の方法を学ぶことを目的としているが、本来の目的は論文を書くことではなく、探究活動を通して課題を発見し、根拠を基に考え、自らの考えを他者へ分かりやすく伝える力を育成することである。そのため、本論文を参考にしながらも、単に形式をまねるのではなく、自分たちの活動に合わせて内容を整理し、論理的にまとめることが望まれる。

探究活動は、成果物を完成させることが終着点ではない。本活動で得られた経験や考え方を、今後の学習や進路、さらには社会に出た後の課題解決へ生かしていくことが、本章で示す「展望」の意味である。

## 6. 結論

結論では、論文全体を簡潔に振り返り、研究や探究活動を通して得られた成果と最終的な主張をまとめる。本章では、新たな調査結果や考察を加えるのではなく、これまで述べてきた内容を整理し、論文全体の締めくくりとして記述することが重要である。

本論文では、融合プロジェクトにおける探究論文の執筆例として、論文の基本構成や各章で記述すべき内容、論理的な文章の組み立て方について示した。また、単なる完成例ではなく、各章の目的や注意点、探究活動で身に付けてほしい考え方を盛り込むことで、教材としても活用できる内容となるよう構成した。

探究論文は、活動内容をまとめることだけが目的ではない。課題を発見し、調査・分析を行い、根拠を基に提案や実践へ結び付け、その成果や課題を客観的に振り返り、他者へ分かりやすく伝えることに大きな意義がある。その過程を論理的に文章として整理することで、論理的思考力や表現力、客観的に振り返る力を養うことにつながる。

本論文が、生徒一人一人の探究活動を整理し、自らの考えを根拠をもって表現するための一助となることを期待する。また、本論文を参考にしながら、自分たちの活動内容に合わせて主体的に論文を作成し、探究活動を通して得られた学びを他者へ伝えられることを期待する。

## 7. 参考文献・協力団体

参考文献・参考資料・協力団体では、論文作成や探究活動を進める上で参考にした資料や、協力を受けた団体・企業・個人を記載する。本章は、他者の情報や協力を基に探究活動を行ったことを示すものであり、論文の信頼性を高める重要な役割を担う。

参考文献・参考資料には、書籍、論文、新聞記事、行政資料、Webサイトなどを記載する。Webサイトを参考にした場合は、ページ名だけでなく、運営団体名やURL、閲覧日も記載する。また、本文中で引用した内容や数値については、どの資料を参考にし

たのかが分かるよう整理することが望ましい。

探究活動では、多くの班が企業や自治体、学校、地域住民などと連携して活動を行う。そのため、協力を受けた団体や担当者には、感謝の意を込めて名称を記載する。ただし、個人名を掲載する場合は、事前に掲載の可否を確認し、個人情報への配慮を行うことが重要である。

### 【記載例】

〈書籍〉

〇〇 〇〇 (2025) 『探究活動入門』 〇〇出版社

〈Webサイト〉

〇〇市役所「〇〇に関する調査」

<https://www.example.jp>

(最終閲覧日：2026年7月10日)

〈論文〉

〇〇 〇〇 (2024) 「〇〇に関する研究」『〇〇学会誌』第12巻，第3号，pp. 10-18.

〈協力団体〉

- ・ 〇〇市役所 〇〇課
- ・ 〇〇株式会社
- ・ 〇〇高等学校 〇〇先生

# チェックリスト

# 論文提出前チェックリスト

提出前に、以下の項目を班で確認すること。すべて確認した後、担当教員の確認を受け、共有ドライブの提出先フォルダへ該当する論文データを移動する。

## 1. 書式・体裁

- ☐ フォントはすべて **MS明朝** になっている。
- ☐ タイトルは **28pt** になっている。
- ☐ 班番号と氏名は **11.5pt** になっている。
- ☐ 本文は **10.5pt** になっている。
- ☐ 章タイトルは **太字** になっている。
- ☐ 要旨は **200～350字** で書かれている。
- ☐ タイトルページを含めて **4ページ以上** になっている。
- ☐ 2ページ目以降は、指定どおりに改ページ・段組みが設定されている。
- ☐ 章と章の間は **4行** 空けている。
- ☐ 不自然な空白や不要な改行がない。

## 2. 文章表現

- ☐ 文体は「だ・である調」で統一されている。
- ☐ 「私」「僕」は使用せず、「本班」または「私たち」を用いている。
- ☐ 感想文のような表現になっていない。
- ☐ 「すごい」「たくさん」「よかった」など、曖昧な表現を避けている。
- ☐ 根拠のない断定を避けている。
- ☐ 誤字・脱字がない。
- ☐ 同じ語尾や同じ表現が続きすぎていない。

### 3. 内容・構成

- 表題は、研究・探究内容が分かるものになっている。
- 要旨には、研究の背景・目的・内容・成果や結論が簡潔に書かれている。
- 研究背景と目的では、課題を発見したきっかけ、現状の課題、研究目的が書かれている。
- 調査・分析では、調査方法、調査結果、結果から分かったことが区別されている。
- 解決に向けた提案と実践では、考えた解決策、実践した内容、その結果が書かれている。
- 考察では、活動を通して分かったこと、成果や課題が根拠をもとに書かれている。
- 今後の課題と展望では、今後必要な取組や発展の可能性が書かれている。
- 結論では、研究全体のまとめと最終的な主張が書かれている。

### 4. 図表・資料

- 図や表を使用している場合、番号とタイトルを付けている。  
例：図1 ○○の結果／表1 ○○への回答
- 図表が何を示しているのかを本文中で説明している。
- 図表から何が分かるのかを本文中で明記している。
- 外部の団体や企業に協力してもらった場合、協力団体として記載している。

### 5. 最終確認

- 論文とインフォグラフィックの主張にずれがない。
- 班員全員で内容を確認した。
- 担当教員の確認を受けた。
- ファイル名は以下のようにになっている。  
例：0班\_論文

### 6. 提出期限

仮提出期限は 7月9日(木)16:00 である。

チェックリストで確認を行い、担当教員の確認を受けたうえで、共有ドライブ提出先フォルダへ該当する論文データを移動すること。